

『唐陽山人詩鈔』細目次

iv

『唐陽山人詩鈔』本文影印

1

序 5

目録 9

卷一 今體詩一百三首 11

卷二 古今體詩九十三首 43

卷三 古今體詩一百五十六首 73

卷四 古今體詩一百九首 123

卷五 古今體詩一百八十四首 157

卷六 今體詩一百四十六首 213

解題

佐藤裕亮

257

『唐陽山人詩鈔』解題 259

『唐陽山人詩鈔』研究序説——序の訳注と考察

260

停年名簿にみる横川徳郎の軍歴

283

記念対談「父祖の遺したもの」

横川
端

287

父・横川正二のこと 290

帰国、伝え聞いた父祖のことなど

295

墓参、横川正二の面影

296

伯父・横川毅一郎のこと

297

あとがき

303

横川唐陽略年譜（稿）

308

書陽文
卷之七

序

唐陽橫川君以醫官在陸軍二十四年從日清日露兩役又就任東中二京南海北海諸處戍役北京天津臺灣遼陽等皆有功績就中日露之役在第一師團以衛生隊醫長出入生死之際能完其職責其隊受感狀君功居多云君公餘學詩于槐南詞宗刻苦砥礪與寧齋霞庵東郭諸子爲所謂雪門翹楚故官迹到處吟詠太富所得詩長短一千餘篇何其盛也近歲退現役住東京澁谷街專業醫前日近鄰失火延燒君宅典籍書畫皆歸烏有君嘆惜不措頃來訪予廬曰平生所作稿本

幸免祝融之害友人爲吾欲鈔而刻之請一言題其首
予觀君詩巧而不纖清而能腴得蘇長公雋味其才華
魄力寔足與康乾諸豪相匹敵鷗外森博士爲君上司
常服君詩每一吟成就君求益呼以先生嗚呼君之於
詩亦可稱國手矣哉大正壬戌孟冬書于城北青原草
廬九峰高鳴張時年七十七

唐陽山人詩鈔目錄

卷一

今體詩一百三首

卷二

古今體詩九十三首

卷三

古今體詩一百五十六首

卷四

古今體詩一百九首

卷五

古今體詩一百八十四首

卷六

今體詩一百四十六首

解
題

佐藤裕亮

『唐陽山人詩鈔』 解題

上・下二冊、六卷、縦二三・七cm×横五・三cm。横川徳郎著、大正一二年一月一五日印刷、一〇月二〇日発行、著者兼発行者・東京市外中渋谷三七七番地東京府平民横川徳郎、印刷所・静岡県浜松市松城一三ノ八番地株式会社開明堂。横川端氏所蔵。

明治・大正期の漢詩人で陸軍の軍医を務めた横川唐陽（徳郎）の詩集。第一冊には卷一（一六丁、今体詩一〇三首）、卷二（一五丁、古今体詩九三首）、卷三（二五丁、古今体詩一五六首）を、第二冊には卷四（一七丁、古今体詩一〇九首）、卷五（二八丁、古今体詩一八四首）、卷六（二二丁、今体詩一四六首）を収める。陸軍退役後、横川徳郎（唐陽）は渋谷で医院を開業したが火災に遭い多くの家財を失い、のち、友人たちの協力を得て、遺された詩稿をもとに『唐陽山人詩鈔』を編んだ。唐陽にはすでに『游燕今體』（一一丁、明治三五年刊）、『論俳絶句』（九丁、明治四四年刊）、『揖五山館集』（二八丁、大正五年刊）、『北海泛宅集』（一四丁、刊行年不詳）などの詩集があり、詩誌や雑誌・新聞の漢詩欄などに掲載された作品も多く、これらの作品が詩鈔の編纂に基礎を与えたものとみられる。

『唐陽山人詩鈔』研究序説——序の訳注と考察

明治・大正期の漢詩人にして陸軍の軍医であった横川唐陽。その事績については『明治漢詩文集』所収の略歴や、藤川正数『森鷗外と漢詩』『讃岐にゆかりのある漢詩文』に収められた論考の一部に言及がみられるものの、伝記資料の少なさから長く不十分な段階に留め置かれていた。そのような状況の中で、筆者は、縁あつて横川唐陽の調査・研究を進め、二〇一六年、論創社より『鷗外の漢詩と軍医・横川唐陽』を上梓した。本書は、唐陽の前半生を主な対象として、明治初頭の教育制度や明治陸軍の軍医制度、日露戦争や森鷗外との関係に注目しつつ唐陽の事績について論究しているが、残された課題もまた多い。とりわけ『唐陽山人詩鈔』に代表される唐陽の漢詩集や、そこに収録された作品の鑑賞・研究は、彼の文学史上における位置を確認する上で欠かせない。

横川唐陽（徳郎）は慶応三（一八六八）年に諏訪神戸村に生まれた。のちに上京し、千葉の第一高等中学校医学部に学びつつ、森槐南やその門下、野口寧斎や落合東郭、森川竹篔といった同世代の詩人たちと交わり、漢詩人としての素地を養つていく。医学部卒業後は陸軍の軍医となり日清戦争に従軍。任地の台湾で森鷗外と語らい、以後、漢詩を通じた文学的交友は鷗外の晩年まで続いた。その後

唐陽は、軍医として明治三陸地震に伴う災害派遣、義和団事件の際に行われた清国出兵、日露戦争などを経験し、東京・豊橋・名古屋・浜松・善通寺・旭川と異動のたびに住まいを転々とする生活の中で漢詩をよみ続け、『游燕今體』『論俳絶句』『揖五山館集』などの詩集を刊行している。大正七（一九一八）年に一等軍医正をもって予備役となり、東京で医院を開業。大正一一（一九二二）年に火災に遭い家財を失うが、友人たちの助力を得て詩稿をまとめ『唐陽山人詩鈔』を刊行、昭和四（一九二九）年に六三歳で亡くなっている。

唐陽の伝記を記すにあたり、基礎をあたえた資料が『唐陽山人詩鈔』に収録されたふたつの「序」であった。高嶋九峰と磯野秋渚によつて記されたこの文章は、漢詩人としての横川唐陽の相貌を、同時代の新しい他者の視点から過不足なく伝えたいものとして、大きな意味をもっている。そこで本稿では「序」の訳注を示し、江湖の批正を仰ぎ、今後の横川唐陽研究の礎としたいと考えている。

※語釈中に掲げた参考文献については、原則としてタイトル名と当該章題ないし頁数を記し、他の書誌情報については本稿末の「参考文献」に示した。また、本稿ならびに拙著『鷗外の漢詩と軍医・横川唐陽』では、軍歴を調査するにあたり、防衛庁防衛研究所史料閲覧室所蔵『陸軍現役将校同相当官実役停年名簿』を基本史料として使用しているが、その記載内容については、「停年名簿にみる横川徳郎の軍歴」（二八三頁）として整理し、本稿語釈中には「停年名簿（調査年月）」の形式で注記した。

記念対談 「父祖の遺したもの」

横川端

聞き手…赤羽良剛・佐藤裕亮

(二〇一七年五月三一日 ホテルニューオータニ)

佐藤

本日はお集まりいただきありがとうございます。まずは私から、今回の対談の趣旨についてご説明させていただきます。

水師營で唐陽の筆跡を発見してから六年以上、本格的な調査・研究に取りかかり始めてから四年近くが経ち、唐陽の歩んだ人生もしいに明らかになりつつあります。『鷗外の漢詩と軍医・横川唐陽』（論創社、二〇一六年）刊行からまもなく一年を迎え、筆者のもとにも各方面からさまざまなご意見・ご感想が寄せられています。唐陽の人生を明治期の教育制度や軍医制度など、歴史的事象を踏まえて丹念に描いたことに高い評価を頂戴した一方で、詩人としての唐陽の足跡を、その作品とともに深く、克明に描き出してほしい、という要望も寄せられています。また本書を、唐陽という一明治人の生涯に、深く浸透していた漢詩文というリベラルアーツの深さを描いた作品としてお読みになり、自身に連なる祖先たちの生き様やそれを支えた「教養」に思いを馳せた、という声もいただいています。いうまでもないことですが、家庭にはじまり、その人生の過程で育まれた教養が、そのひとの人生をいつそう豊かなものにしていただろうことは、想像にかたくありません。

一方で、横川唐陽だけではなく、兄である横川三松やその息子たち、美術評論家として知られた横川毅一郎さんや、教育者であった横川正二さんも、多彩な活動のあとを残されています。そうした一面は、経済人として長くご活躍をされ、現在、俳人としても知られる端さんの姿と

も重なりあうものであるように感じられます。

本日は、本プロジェクトの振り返りにあわせて、信州横川家の中で育まれた教養の世界の一端を、父祖の思い出やご自身の経験などを通じて伺わせていただければ幸いです。

父・横川正二の口から

赤羽 教養の基礎をつくる時期に横川端さんは、満州のほうに行かれて、一定期間あちら側でそれ

どころではない人生を過ごされているわけ。いかがでしょう、信州横川家の教育・教養環境のようなものを実感された記憶はお持ちですか？

横川 非常に少ないのですけれども。私が生まれる前に多くの人は亡くなっていますから、直接、なにか具体的に聞かせてもらったことはほとんどないですね。いま赤羽さんのお話にあったように、軍国主義の時代に父親は満州に出かけて、その地でわずか四〇歳でこの世を去ってしまった。私はまだ一二歳で、一応のことは頭に残っていますけど、やはりまだ子供でしたし、父親も忙しかったから、家のことやものの考え方について、具体的に教えてもらう機会はなかった。結局、父親の背中を見ながら、父はこういう人だった、父祖もおそらくそういう気質で、その

◇横川正二（よこかわ・しょうじ）

一九〇三（明治三六）年九月二九日、横川庸夫（三松）の次男として生まれる。一九二二（大正一一）年に諏訪中学校（現・諏訪清陵高校）を卒業、地元四賀小学校教員として奉職。のち永明小学校・境小学校に転任。この間、作歌の他に音楽や水彩画、郷土史の研究、謄写版の出版なども手がけている。一九三一（昭和六）年、同村の矢崎郁と結婚。郁との間に端・永子・亮・竟・紀夫の四男一女をもうける。一九四一（昭和一六）年四月、満蒙开拓青少年義勇軍の渡満者を率い、満州国牡丹江省寧安県義勇隊寧安訓練所横川中隊中隊長として着任、のち西海浪龍川義勇隊开拓团长となる。一九四四（昭和一九）年六月二四日、現職のまま病没。歌集に『白膠木』がある。

【参考文献】

- 横川正二『白膠木——夜川善二歌集』（私家版、一九七四年）
四賀村誌編纂委員会編『諏訪四賀村誌』（四賀村誌刊行会、一九八五年）
横川端編『遙かなり——夜川善二を偲ぶ』（私家版、二〇〇七年）
横川端『エッセイで綴るわが不思議人生』（私家版、文藝春秋企画出版部、二〇一六年）

中でああいう父親ができたんだろう、と。

どちらかといえば父は、純粹だったんですね。二五〇人の生徒たちの命を守りたい、という思いで、全部苦勞を背負い込む。結局それが災いして、自分が先に命を落とす。そして遺された部下たちはほとんどシベリアに連れて行かれて、かなりの人々が亡くなっている、と。そういう状況です。

我々家族は、親父が死んだので諏訪へ帰りましょう、ということ、おふくろが三三歳で子供たち五人を連れて帰ってくるんです。昭和一九年秋のことですから、そろそろ戦争も終わりに近い時期でしたね。父親は、連れてきた自分の教え子たちがどうなっていくか、ということだけを心配して死んでいってしまい、遺言もないんですよ。だから、受けた印象だけで私たちが父親を記憶している、と。

佐藤

満州に行かれる前の正二さんは、日々をどのように過ごされていたのでしょうか。

横川

私が小学校四年生のはじめぐらいまで諏訪の古い家において、父親は小学校の先生として、諏訪地方の学校を転々とするわけです。音楽が好きだったと思うんですよ。あまりものは書きませんでした。短歌だけは熱心に取り組んでいました。郷土の歌人赤彦へのあこがれだったのかな、と思うんです。島木赤彦とアララギ——に関心をもち、その道が続けていきたいと。満州に行ってから作っています。やはりどんなに忙しくても続けていこうという意識をもつ

❖ 編者紹介

横川 端 (よこかわ・ただし)

1932年長野県諏訪郡四賀村（現・諏訪市）生まれ。1941年旧満州牡丹江省に移住、1944年帰国。1946年旧制諏訪中学（現・諏訪清陵高校）入学。1947年家庭の事情により同校中退後、大和工業（現・セイコーエプソン）入社。1962年有限会社ことぶき食品を兄弟で立ち上げる。1974年株式会社すかいらーくに称号変更。1988年東京交響楽団理事長就任（現・会長）、2002年すかいらーく役員退任。

著書に『ひばりよ——すかいらーく社内報巻頭言集』、『エッセイで綴るわが不思議人生』（文藝春秋企画出版部）、句集に『牡丹』（ふらんす堂）、『白雨』（遊牧舎）などがある。

佐藤 裕 亮 (さとう・ゆうすけ)

1983年東京都練馬区生まれ。2006年大正大学文学部史学科卒業、2008年明治大学大学院文学研究科史学専攻アジア史専修博士前期課程修了、2016年同博士後期課程単位取得退学。学部・大学院を通じて東洋史（中国仏教史）を専攻、近年では明治～大正期の陸軍軍医・漢詩人横川唐陽に注目し、調査・研究を進めている。

著書に『鷗外の漢詩と軍医・横川唐陽』（論創社）、主要論文に「梁啓超の経録研究をめぐって」（『明日へ翔ぶ2』風間書房）、「戦時体制下のアジア仏教史」（『図書の譜』17号）、「魏晋南北朝時代における一仏教僧の修道」（『文学研究論集』41号）などがある。

横川唐陽 『唐陽山人詩鈔』
本文と解題

二〇一七年二月二五日 初版第一刷印刷
二〇一七年二月一九日 初版第一刷発行

編者 横川 端

佐藤裕亮

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

〒一〇一〇〇五一

東京都千代田区神田神保町二二三 北井ビル

電話 〇三二三二六四一五二五四

FAX 〇三二三二六四一五二三三一

web. <http://www.ronsoc.co.jp/>

振替口座 〇〇一六〇一一五五二六六

装幀 宗利淳一

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

© YOKOKAWA Tadashi, SATO Yusuke 2017 Printed in Japan.
ISBN978-4-8460-1648-7

落丁・乱丁本はお取り替えいたしません。